

# 裏山遺跡Ⅱ

福岡県筑後市大字上北島所在遺跡の調査  
筑後市文化財調査報告書  
第74集

2007  
筑後市教育委員会

# 裏山遺跡Ⅱ

うらやまいせき  
裏山遺跡 3次調査

2007  
筑後市教育委員会

## 序

今回報告する「裏山遺跡」は、筑後市教育委員会の発掘調査報告書第1集を飾る遺跡地であり、筑後市の文化財行政のスタートを切る特別な遺跡であるとともに、縄文時代早期の土器が出土する重要な遺跡であります。そのため過去にはこの地に竪穴住居を復元し、現在では公園整備の際に遺跡説明の案内板などを設置し、地域の歴史認識に重要な役割を担ってきました。

今回が3回目の報告となりますが、本報告書によって、研究材料とし活用され、より地域の歴史が深まることになれば幸いです。また、本報告書に携わったすべての方に感謝の意を表します。

平成19年3月31日

筑後市教育委員会  
教育長 城戸一男

## 例言

1. 本書は九州新幹線に伴い、平成 17 年度に実施した裏山遺跡の埋蔵文化財発掘報告書である。
2. 発掘調査及び出土遺物の整理は筑後市教育委員会が行った。出土遺物、図面、写真等は筑後市教育委員会で収蔵、保管している。発掘調査及び整理作業の関係者は第 1 章に記している。
3. 本書に使用した図面の遺構図については阿比留士朗が行い、遺物の実測、浄書は丸山裕見子が行った。
4. 本書に使用した遺構・遺物の写真撮影は阿比留が行った。
5. 今回の調査に用いた測量座標は国土調査法第Ⅱ座標系（日本測地系）を基準としている。
6. 本書に使用した遺構の表示は以下の略号による（筑後市における埋蔵文化財の取り扱いについて：2002 に準拠している）。  
SD - 溝   SK - 土壇   SP - ビット   SI - 住居跡   SX - 不明遺構  
また、本文中の出土遺物について○×○の表記は両方の可能性が考えられるという意味である。
7. 本書の編集、執筆は阿比留が行った。

## 目次

I . 調査経過と組織	1
II . 位置と環境	2
III . 調査成果	3

写真図版

## I. 調査経過と組織

筑後市大字上北島字裏山 971-1、972-1 の 529 ㎡ に住宅建設の計画があり、開発原因者である下川正男氏の代理である有限会社 西村不動産から文化財の有無について筑後市教育委員会に確認があった。当該地は文化財包蔵地であったために、平成 17 年 8 月 9 日に試掘を行ったところ文化財が確認された。この結果をもとに下川氏、西村不動産、筑後市教育委員会で協議を行い、建物部分に関しては造成で対処し、恒久的構造物である道路部分の約 80 ㎡のみを調査対象とすることになり、平成 17 年 10 月 24 日から同年 11 月 16 日まで発掘調査を行った。

発掘調査に関わる調査組織は以下のとおりである。

### 1) 平成 17 年度（試掘・本調査）

総括	教育長	城戸 一男
	教育部長	菰原 修
庶務	社会教育課長	田中 僚一
	文化スポーツ係長	角 恵子
	文化スポーツ係	永見 秀徳（事前審査担当）
	（文化財担当職員）	小林 勇作
		上村 英士
		阿比留士朗（本調査担当）

### 2) 平成 18 年度（報告書）

総括	教育長	城戸 一男
	教育部長	平野 正道
	社会教育課長	田中 僚一
	文化スポーツ係長	北島 鈴美
	文化スポーツ係	永見 秀徳
	（文化財担当職員）	小林 勇作
		上村 英士
		阿比留士朗（報告書担当）

### 3) 発掘調査参加者 地元有志

### 4) 整理作業参加者

整理補助員	丸山 裕見子	猿渡 式子
整理作業員	横溝 愛	

## Ⅱ. 位置と環境

筑後市は福岡県の南西部、筑紫平野の中央部に位置する。市域をJR鹿児島本線と国道209号が縦断し、国道442号が横断する。また、市南西部には一級河川の矢野川、中央部には山ノ井川や花宗川、北部には倉目川が西流する。市北部には耳納山地から派生する八女丘陵が西に延び、灌漑用の溜池が点在する。低位扇状地である東部や、低地である南西部には農業水路が発達している。当市は県内有数の農業地帯であり、北部の丘陵地域では果樹園や茶畑、東部では米麦中心の田園地帯が広がる。市街地は国道に沿って市の中心部に形成されている。

筑後市東部地域はホ場整備事業により発掘調査が市内でも比較的多く行われている。その結果各時代の遺物は一定量出土しており、特に縄文早期の遺物や、その段階に帰属すると考えられている石組み遺構や落とし穴が検出されている。市内域では縄文早期の遺物を出土する遺跡は散開的に分布しているが東部地域から当遺跡にかけては帯状に集中して見られる。このことから、縄文早期後半には定住化もしくは、ベースキャンプ化に伴う人々の生活動線が存在していたものと思われる。

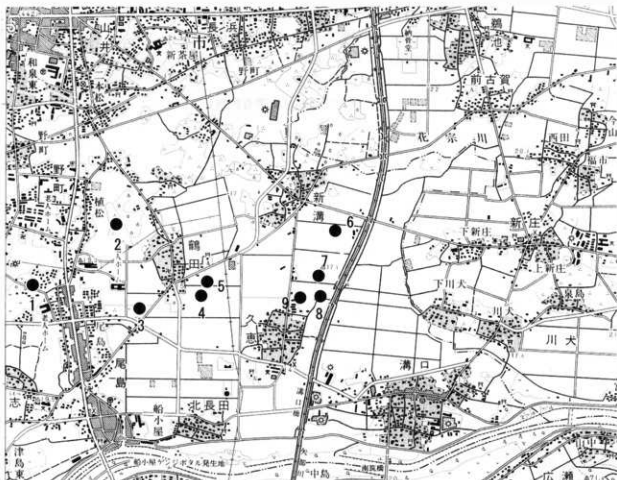


Fig.1 周辺遺跡分布図 (1/25000)

- |            |           |           |            |
|------------|-----------|-----------|------------|
| 1. 裏山遺跡    | 2. 牛ヶ池遺跡  | 3. 鶴田岸添遺跡 | 4. 鶴田橋原遺跡  |
| 5. 鶴田武津恵遺跡 | 6. 久恵中野遺跡 | 7. 久恵権藤遺跡 | 8. 久恵川ノ上遺跡 |
| 9. 久恵岸ノ下遺跡 |           |           |            |

### Ⅲ. 調査成果

#### 裏山遺跡 第3次調査

##### (1) はじめに

当遺跡は、筑後市大字上北島字裏山971-1に所在する。今回の調査は第3次調査であり、第1・2次調査区は第3次調査区から北東方向に位置し、現在は公園として市民に活用されている。また、調査区は道路部分にあたる東西16m×南北3mを設定し、平成17年10月24日から同年11月16日まで調査をおこなった。現地での調査・遺構実測・写真撮影は阿比留土朗がおこなった。

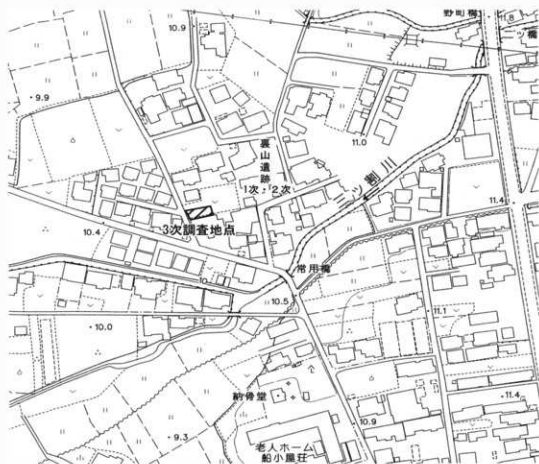


Fig.2 調査区地点位置図 (1/2500)

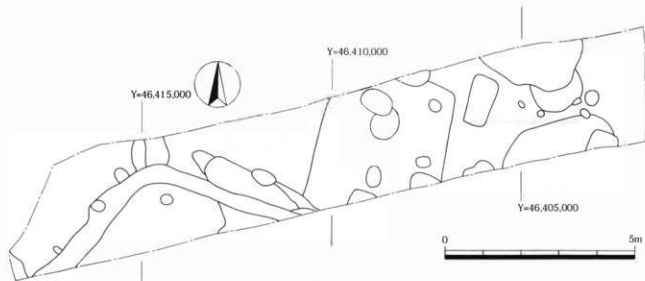


Fig.3 遺構位置略図 (1/100)

## (2) 検出遺構

### 土坑

#### 3SK01 (Fig.4, Pla.1)

調査区東端に位置しており南側調査区外に延びていく土坑である。短軸 0.6 m、長軸は調査区外に延びていくために不明であり深さは 0.5 m を測り長方形を呈する。

#### 3SK01 出土遺物 (Fig.5)

1. は押型文土器の口縁部片である。外面には楕円文を施す。2. は甕の口縁部片である。口縁は「く」字状を呈しており、残存は上部のみである。3. は鉢の口縁部であり、口縁部内面が肥厚し丸みを帯びる。

#### 3SK02 (Fig.4, Pla.1)

SK01 より西側に位置しており南側調査区外に延びていく土坑である。幅 0.6 m、深さは 0.4 m を測る円形土坑であり、この土坑の西側には幅 0.2 m、深さ 0.1 m の浅い窪みがある。土層観察では柱痕が確認された。

#### 3SK02 出土遺物 (Fig.5)

4. は鉢の口縁部であり、口縁部は折り返しによる成型で玉縁状を呈している。

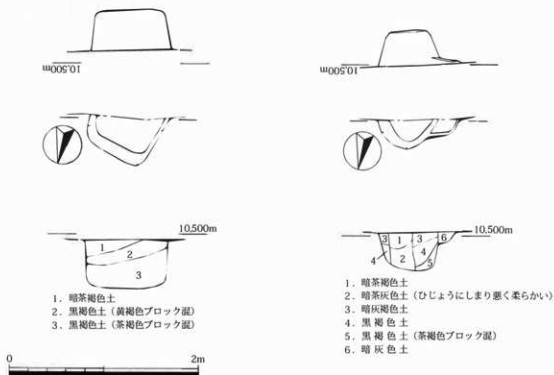


Fig.4 3SK01・3SK02 遺構図 (1/40)

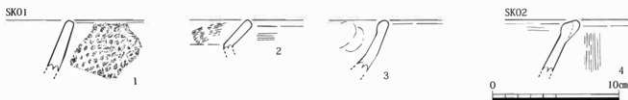


Fig.5 3SK01・3SK02 出土遺物 (1/3)



### 3SK03 (Fig.6, Pla.2)

SK02の北側に位置しており、短軸0.7m、長軸1.35mの長方形を呈する土坑である。また、それぞれ検出面より0.2m、0.55m、0.76mと土坑内は北側に向かって階段状に低くなっており、中段は「L」字状に面が残っている。

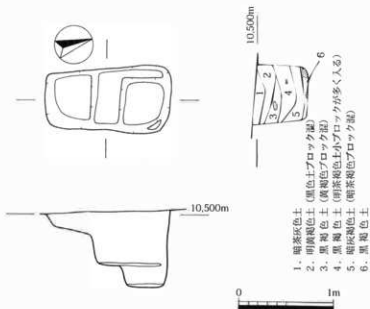


Fig.6 3SK03 遺構図 (1/40)

### 3SK03 出土遺物 (Fig.7)

5～7とも押型文土器の体部片である。それぞれに外面に押型文が施されているが、磨滅されており見えづらいが連珠文と思われる。内面は無文であり、胎土には角閃石や石英などの砂粒を多く含む。また、この遺構は図化不能な土器も多く出土しており、その中にはハケ目を施した土器などもあるために当遺構は弥生時代の遺構である。

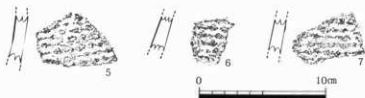


Fig.7 3SK03 出土遺物 (1/3)

### 3SK04 (Fig.25)

調査区中央よりやや西に位置しており、南側調査区外に延びていく深さ0.06m～0.15mの浅く、広い土坑である。

### 3SK04 出土遺物 (Fig.8)

8・9は押型文土器の体部片である。8は口縁部に近く内面に条痕文を施している。外面は無文である。9は外面に大型の楕円文を施している。10・11は同一個体と思われる壺の口縁部であり、器壁は薄く、外面には磨きが施されており、内面には輪積もしくは粘土紐巻上げの成型痕が看取される。

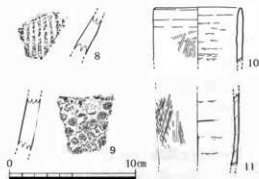


Fig.8 3SK04 出土遺物 (1/3)

### 3SK07 (Fig.9)

調査区中央の北側調査区外に延びていく楕円形を呈すると思われる土坑である。長軸は0.9m、深さは検出面より0.55mを測る。住居址SI06を切る。出土遺物はなかった。

### 3SK08 (Fig.9)

調査区中央に位置しており住居址SI06を切る土坑である。長軸0.9m、短軸0.6m、検出面よりの深さは約0.35mである。遺構内北側の深さ約0.15mに一段テラス状に段がつく。

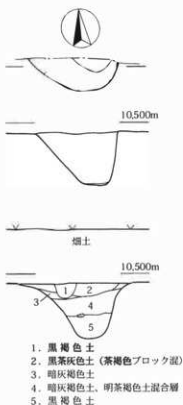


Fig.9 3SK07・3SK08 遺構図 (1/40)

**3SK08 出土遺物 (Fig.10)**

12は裏の口縁部片である。内外面に磨耗が激しく調整痕は見られない。また、胎土には砂粒を多く含み焼成も不良である。13は鉢の口縁部片である。口縁端部は水平に施されており、内外面にはハケ目による調整痕が看取される。

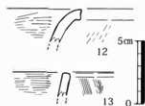


Fig.10 3SK08 出土遺物 (1/3)

**3SK10 (Fig.11)**

調査区西側に位置しており北側調査区外に延びて、周溝状遺構 SD05 に切られる深さ 0.04 m 程の窪み状遺構である。



Fig.11 3SK10 遺構図 (1/40)

**3SK010 出土遺物 (Fig.12)**

14は小型の裏口縁部細片である。口縁部は「く」字状に外に開く。上部はナデによる調整を行い、体部側内面は磨耗により見えにくくなっているがハケ目調整である。15は小型の鉢の口縁部細片である。口縁端部は水平に施されており、内面にはハケ目による調整痕が外面にはナデによる調整痕が看取される。色調は暗灰褐色を呈している。



Fig.12 3SK10 出土遺物 (1/3)

**3SK12 (Fig.25)**

住居址 3SI06 貼り床除去後に検出した長軸 0.9 m、短軸 0.7 m の楕円形を呈する土坑であり、検出面より深さ 0.45 m を測る。また、深さ 0.25 m に三日月状に一段テラスがつく。

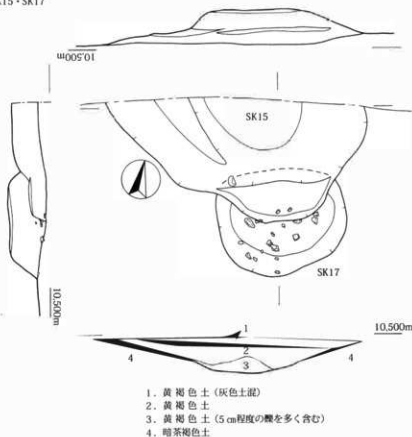
3SK12 出土遺物 (Fig.13, Pla.8)

16 は押型文土器の楕円文を施した胴部細片である。17 は黒曜石製の石鏃である。重さは 0.8 g を測る。



Fig.13 3SK012 出土遺物 (1/3)

SK15・SK17



1. 黄褐色土 (灰色土混)
2. 黄褐色土
3. 黄褐色土 (5 cm程度の礫を多く含む)
4. 暗茶褐色土

SK16

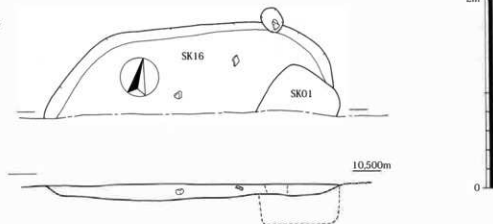


Fig.14 3SK15・3SK16・3SK17 遺構図 (1/40)

### 3SK15 (Fig.14, Pla.6)

調査区東側に位置し、北側調査区外に延びる遺構である。深さは検出面より0.4 m程で遺構内の南側、西側に一段つく。

### 3SK16 (Fig.14)

調査区東側に位置し、南側調査区外に延びて行く長軸3.0 m、深さ0.1 mの楕円形を呈するものと思われる土坑である。

### 3SK17 (Fig.14, Pla.6)

SK15に切られる幅1.35 mを測る円形を呈している土坑だと思われる。深さは検出面より0.35 mを測るが遺物や石などは検出面と同位から0.1 mの間で出土している。また、石は被熱された物が多数であった。

### 3SK015 出土遺物 (Fig.16)

20・21ともに押型文土器片である。外面は菱形に近い押型が施されている。また、21は口縁部に近く内面に条痕文が施されている。

### 3SK016 出土遺物 (Fig.16, Pla.8)

22は押型文土器口縁部片である。外面は小型の楕円文が施されており、内面上部には条痕文、その下位には山形文が施されている。

### 3SK017 出土遺物 (Fig.15・16, Pla.8)

23～27まで押型文土器片である。24・25は大型の楕円文が施されて、他は小型の楕円文である。18・19は石籤である。18は赤褐色を呈するチャート製。19は平面形態三角形を呈する黒曜石製石籤であり、三辺ともに細かい調整をする。

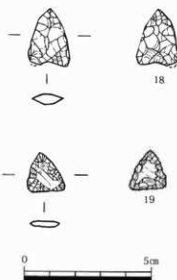


Fig.15 3SK17出土遺物 (2/3)

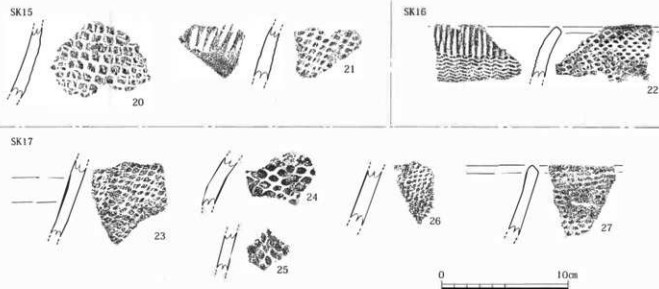


Fig.16 3SK15・3SK16・3SK17出土遺物 (1/3)

### 溝状遺構

#### 3SD05 (Fig.17, Pla.3)

調査区西側に「く」字状に検出された溝である。溝の両端は南側調査区外へ伸びていく。上面幅 0.4 m～0.55 m、底面幅 0.3 m、深さは検出面より 0.2 m～0.3 mを測り、断面形態は逆台形に近いU字状を呈する。この溝は周溝状遺構と思われる。また、周溝状遺構には平面形態が円形を呈するものと方形を呈するものがあるが、今回検出された遺構は方形の周溝状遺構である。

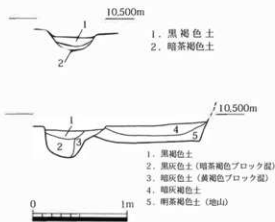


Fig.17 3SD05 土層図 (1/40)

#### 3SD05 出土遺物 (Fig.18, Pla.8)

28・29は押型文土器片である。28は口縁部片であり、内面は条痕文、外面は摩滅により看取されづらい。30～35は口縁部片である。30は鉢であり、口縁部を水平に施す。31～33は甕の口縁部片である。34・35は二重口縁の口縁部片である。34は擬口縁部、35は口縁部であり、外面には縦方向に密なハケ目、内面は横方向のハケ目を施す。36は器台もしくは高杯の脚部である。37は甕である。口縁部は外反し短く、器壁は厚い。

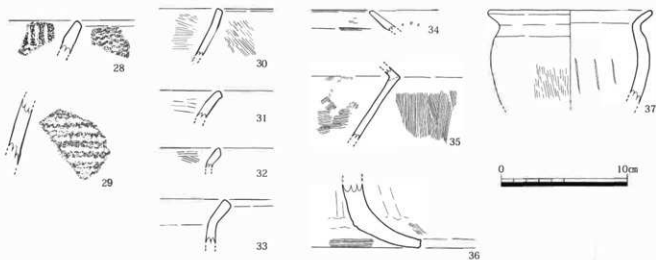


Fig.18 3SD05 出土遺物 (1/3)

### 住居跡

#### 3SI06 (Fig.19, Pla.4・5)

調査区中央に位置しており、北側、南側が調査区外に伸びているために一辺の長さは不明である。内部構造は北東部に南北軸約 1.0 m、東西軸約 1.7 mの長方形を呈する床面より一段高いベット状遺構がみられる。このベット状は地山切り出しのものである。床面は土層図 (Fig.16) 3層にあたり貼り床である。また、住居跡中央部には焼土がみられるために、その位置に炉が設置してあったと思われる。竪穴内にピットは見られないが、南東部には床面から掘り込まれた土坑があり、その土坑内からはすり石と思われる研磨された石が出土した。

#### 3SI06 出土遺物 (Fig.20, Pla.8・9)

38・39は器台の脚部である。外面に縦方向のハケ目を施す。40は甕もしくは鉢の底部片である。底部立ち上がり部分に穿孔が見られる。また、この穿孔は焼成前に穿孔されている。41は鉢である。

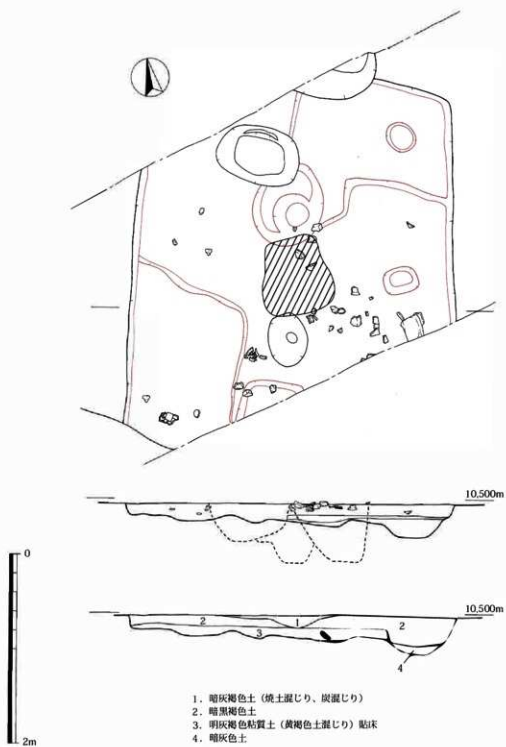


Fig.19 3SI06 遺構図 (1/40)

口唇部は水平に近く、最大径は胴部上位にある。外面の調整痕は磨耗により看取出来ないが、内面調整は斜め方向にハケ目を施す。42は壺の口縁部片である。口縁部上面に粘土帯を貼り付けて肥厚させる。43・44は甕である。ともに口縁部は外側に開く。44は外面に縦方向のハケ目を施し、内面胴部は斜め方向、口縁部は横方向のハケ目を施す。45は石製品である。45は住居址廃絶時とともに埋没した屋内土坑から出土した。示図した箇所が研磨されており、すり石もしくは砥石として使用されたものか。46は製品とは言えない自然石の可能性もある。しかし、一箇所に穿孔があり、穿孔部分には花弁状に剥離痕が存在しているように思える。

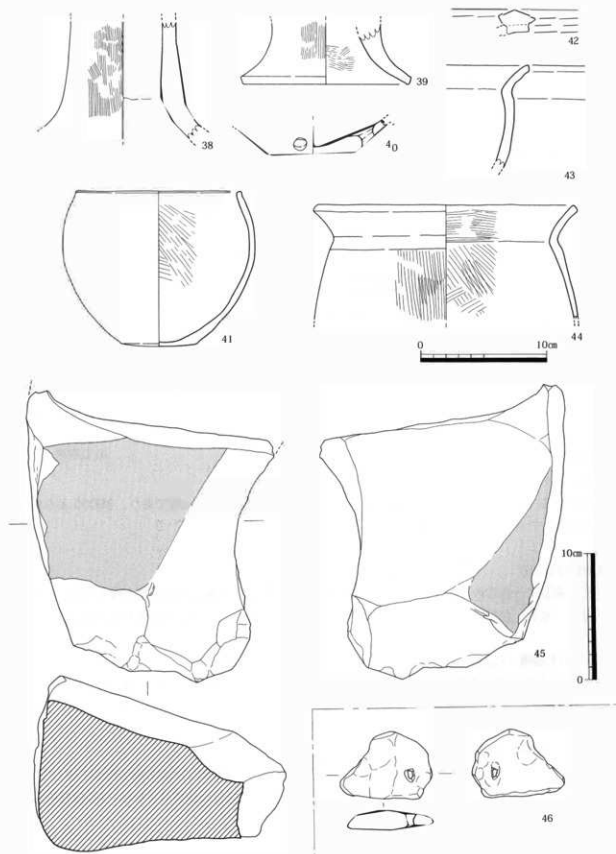


Fig.20 3SI06 出土遺物 (1/3)

## ピット

### 3SP09 (Fig.21, Pla.5)

周溝状遺構 3SD05 の内側に位置しており、長軸 0.35 m、短軸 0.3 m を測り楕円を呈するピットである。また、約 0.15 m の柱痕と思われる形跡があり、ピットの深さは検出面より 0.2 m を測る。

### 3SP11 (Fig.21)

周溝状遺構 3SD05 に切られる。また、長軸側が切られており、短軸は 0.35 m を測る楕円を呈する。深さは検出面より約 0.30 m を測る。この遺構からは完形の遺物が出土した。

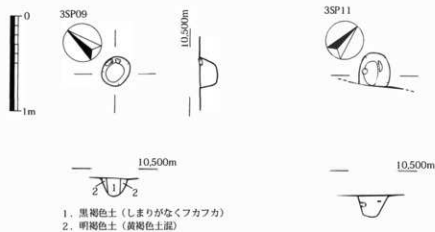


Fig.21 3SP09・3SP11 遺構図 (1/40)

### 3SP11 出土遺物 (Fig.22, Pla.9)

手捏ね成型によるミニチュア土器である。底部は丸底で、口縁部はつまみ出しにより波打つ。



Fig.22 3SP11  
出土遺物 (1/3)

## 不明遺構

### 3SX13 (Fig.25)

調査区西側で見られた浅い窪地状を呈する土坑である。深さは 0.08 m 程であり、3SD05 より南側では見られないために不定形を呈していたものと思われる。

### 3SX14 (Fig.25)

調査区東側で一部看取された押型文土器を伴う暗茶褐色を呈した縄文の包含層の残土と思われる。残土は薄く、また、色調は地山と明瞭な差はないが土器片が混入し、その土器は押型文土器のみである。

### 3SX14 出土遺物 (Fig.23, Pla.9)

48～51 までは口縁部で、50 は口縁部ではないがその直下と思われる。52～61 までは胴部細片である。ほぼ楕円文を施してあり、その楕円は大型である。62 は黒曜石製の石鏃である。

## 表探出土一括遺物 (Fig.24, Pla.9)

検出時、畑土から出土した遺物である。63 は大型の甕であり、口縁部には縦方向に線刻を施している。64 は壺片だと思われる。口縁部直下に平行沈線、その下には波状文が施されている。65 は甕の底部と思われる。



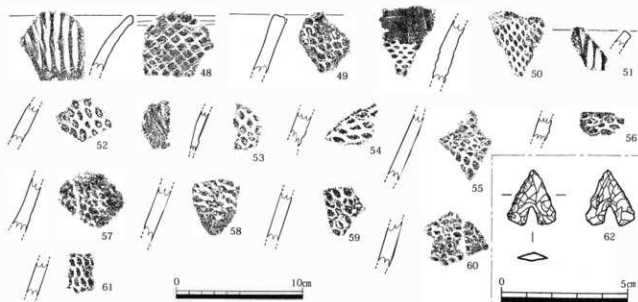


Fig.23 3SX14 出土土器 (1/3) 石鏃 (2/3)

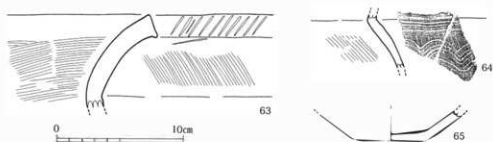


Fig.24 表採出土一括遺物 (1/3)

### (3) まとめ

今回の調査で裏山遺跡の調査は3回目となる。1次調査では縄文早期後半と弥生後期後半の遺物、遺構が報告されており、今回の3次調査でもほぼ前述の時期である、早水台、田村式の遺物、下大隈式期の遺物、遺構がきわめて限定的に見られる。縄文早期後半段階における当市域の状況は東部地域に落とし穴、集石炉などが確認されており、矢部川流域に沿って集中的に見られる。今回の調査地点もその一連の流れの中にあるものと思われるが、落とし穴、集石炉は見られなかった。しかし、3SK15・3SK17は、遺物の出土状況や埋土が地山の色調に近いなど、当該期の遺構だと思われる。

弥生後期後半段階時の遺構は竪穴住居、周溝状遺構、土坑などが検出された。1次調査でも竪穴住居は2棟検出されており、今回の調査で検出した竪穴住居とベッド状遺構の配置など内部構造が類似している。1次調査報告書には西新町式期とあるが下大隈式期の集落と思われる。また、当遺跡より北東に600mの位置にある鶴田西牛ヶ池遺跡には集落の存在が知られており、この鶴田西牛ヶ池遺跡は弥生後期終末以降が主体の集落遺跡であり、下大隈式期以降の遺構が裏山遺跡から検出されていない事などから裏山から鶴田西牛ヶ池に集落を移転したと推測することが出来るだろう。

今回の調査では石鏃などの石器の出土数4点に比べると剥片は155点と多く出土した。その内148点が黒曜石である。1次調査報告書中에서도剥片が多く出土した図面が見受けられ、その図面には石鏃工房とある。今回の調査では剥片の1/3は住居址の埋土からの出土であり、残りも各遺構から出土しており、遺構の大小によって出土量が比例しているように感じ、遺構が埋まる際に包含層にある剥片が混入した印象を受ける。そう考えるならば当遺跡は縄文早期段階に石器などを製作していた場所であったのだろう。前述した通りに当遺跡から東側には落とし穴などが確認された遺跡があるために付近は狩場であり、このような状況の中で縄文早期後半の裏山遺跡はベースキャンプ的な遺跡だったと思われる。

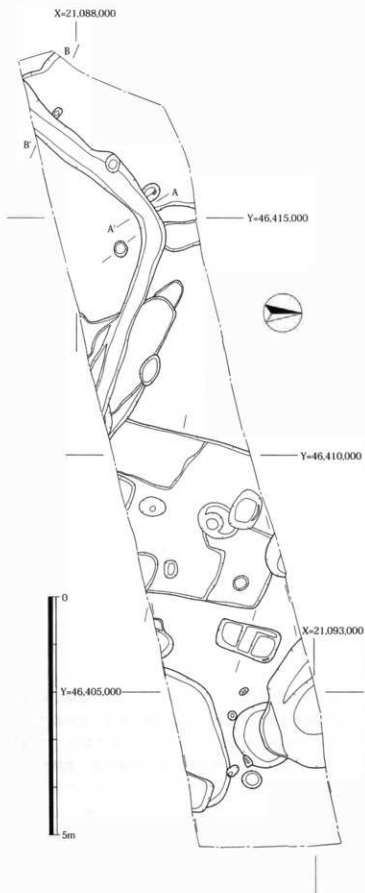
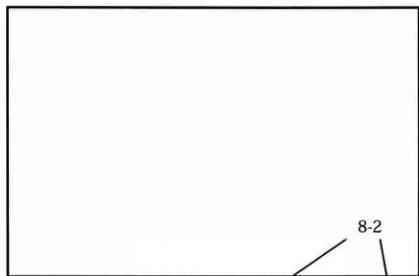


Fig.25 裏山遺跡3次調査遺構図(1/80)

# PLATE

## 凡 例

遺物写真右下の番号は、以下のとおりである。



8-2

Fig 番号

遺物番号



裏山遺跡3次調査 SK01 土層 (北から)



裏山遺跡3次調査 SK02 土層 (北から)



裏山遺跡3次調査 SK03 土層 (北から)



裏山遺跡3次調査 SK03 完掘 (南から)



裏山遺跡3次調査 SD05 土層 (東から)



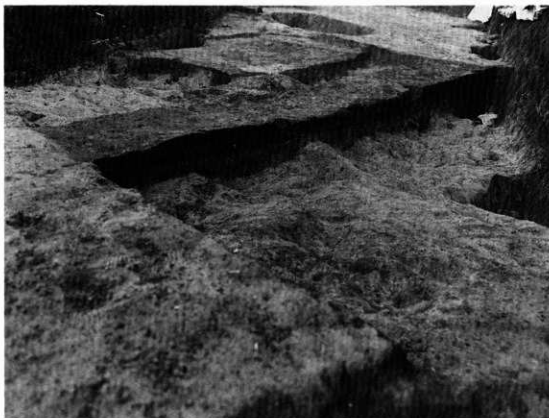
裏山遺跡3次調査 SD05 出土状況 (西から)



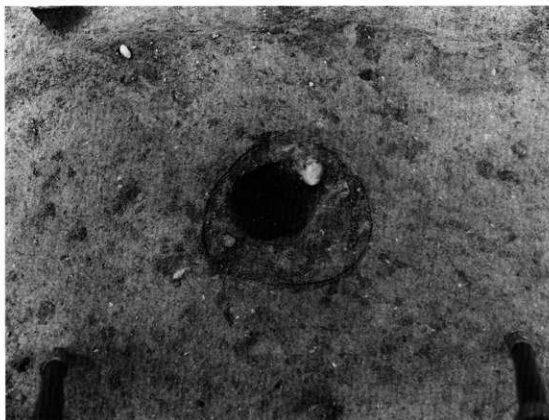
裏山遺跡3次調査 SI06 出土状況（北から）



裏山遺跡3次調査 SI06 完掘（北から）

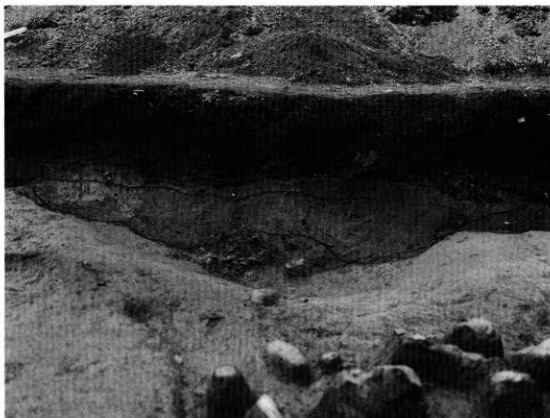


裏山遺跡3次調査 SI06 土層（南西から）



裏山遺跡3次調査 SP09（南から）

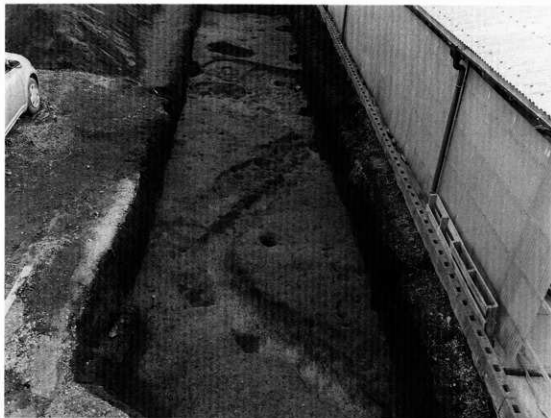




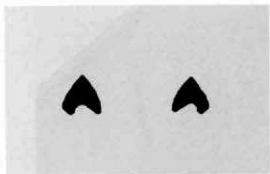
裏山遺跡3次調査 SK15 土層 (南から)



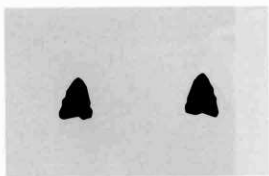
裏山遺跡3次調査 SK17 出土状況 (南から)



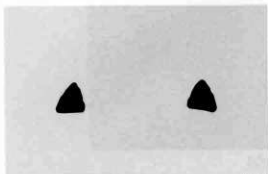
裏山遺跡3次調査 調査区全体 (西から)



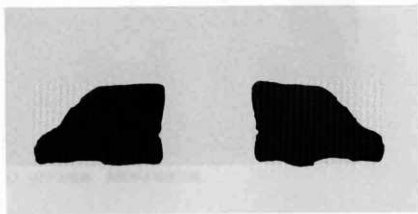
13-17



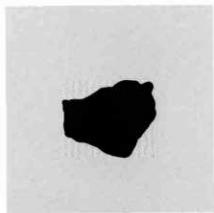
15-18



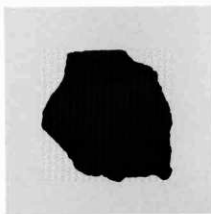
15-19



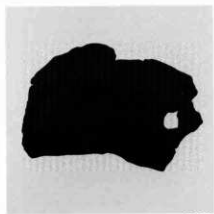
16-22



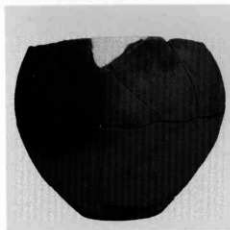
16-24



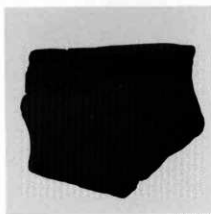
18-37



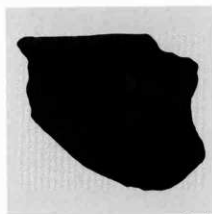
20-40



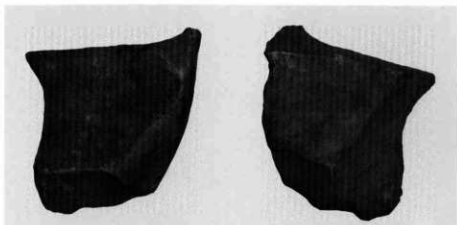
20-41



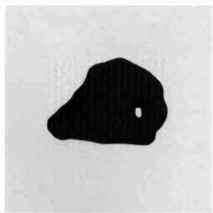
20-43



20-44



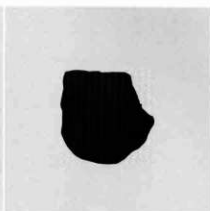
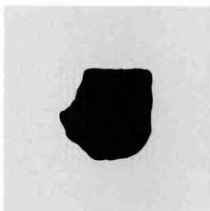
20-45



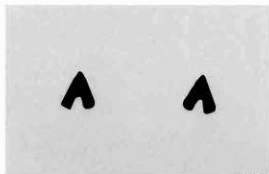
20-46



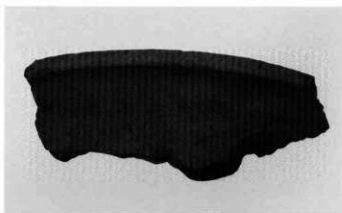
22-47



23-48



23-62



24-63

筑後市文化財調査報告書 第74集

**裏山遺跡Ⅱ**

平成19年3月31日

発行 筑後市教育委員会  
福岡県筑後市大字山ノ井898  
TEL 0942-53-4111

印刷 大同印刷株式会社  
佐賀市久保泉町大字上和泉1848-20  
TEL 0952-71-8520 (代)